

<書評>田中単之著『三好十郎論』

著者	前田 角蔵
雑誌名	日本文學誌要
巻	52
ページ	85-86
発行年	1995-07-08
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019851

ろう。が、淡々と事実を記したなかにも目をそむけるような朝鮮人・現地人慰安婦の惨状が語られ、日本人、あるいは男性への信頼感を根こそぎ覆されるようなショックを受ける。

「女は顔を横に向け、寝たままでラーメンをすすり、股をひろげている。兵隊は、ほんの五、六秒ですませ次の番」などとあり、これはまさに売春制度を肯定する男性の必読の書ではないかと思う。外国軍隊には存在しない。

田中 單之著

『三好十郎論』

著者は、序章、「人生相渉とは何か——十郎・芭蕉・透谷」において、三好十郎は「解放戦線上の一人の雑兵たらん事を最大の目的」とする姿勢を「いささかも崩」すことなく、「脱皮に次ぐ脱皮をもって」ついに「文学の高みへ登りつめて行った」と述べ、「透谷、芭蕉とは逆のコースを歩いて『人生相渉の文学』を織り成した」と最大級の評価を惜しま

い従軍慰安婦制度がなぜ日本には存在したのか。公娼制度を継続させた非宗教的・没倫理的性意識と、アジアの植民地・非占領地の民衆への差別意識がもつとも醜悪な形で結び付いたためではないだろうか。読後、さまざまな考察へと導く刺激的な一書である。

(こばやし ひろこ・文学部講師)

▽一九九四年・梨の木舎・一八五四円

▽著者〓一九四八年卒

前 田 角 蔵

ない。

著者は、「あとがき」で明らかにされているように、若き情熱的な教師時代から三好十郎と個人的な交流をし、その『文学』『思想』と対話しつつ自己を形成してきた研究者である。民衆の問題、知識人の問題、政治と文学の問題、戦争と平和の問題は、三好にとって切実な問題であった。しかし、それ以上に、

著者にとつてもまた切実この上ないものなのであった。本書では、〈三好十郎〉は単に語られているわけではない。語ることは、同時に著者自らのいきざまを語ることであった。そこには、著者自身が抱え込んで来たこれらの問題にある決着をつけようとする強い意志と情熱が溢れている。読む者に強い感銘を与えるのは何よりもまずこうした著者の姿勢ゆえである。

さて、本書の概略を示せば、I章では、まず、プロレタリア文学時代の三好の問題点が考察され、II章では、転向時代の三好がかなり批判的に考察され、III章では、戦後の知識人としての三好の独自の位置が考察されている。著者は、三好が「生れついでのアナキスト」であり、「最も虐げられた者の眼」を持つ反面、「その眼からしか現象を見ようとしないうる心」でもあったプラス・マイナスをしっかりと押えている。本書では、この三好がどのようなにして、「真の知識人とは、たえずノイローゼにおかされつつも、どこへも脱出せず、それに耐えて病的なノイローゼにはならず、自分の属している社会全体をどんな種類の絶対主義にも渡さぬための抗毒素として存在し

つづける者のことだ」という境地に辿り着いたかが粘り強く追求されている。

II章に収められた「斬られの仙太」論では、「三好および仙太」が「抵抗」という方法によって「歴史的・階級的制約」というものにたたかいを挑んだ」ものだという見解が示されている。この「抵抗の思想」は、戦後、三好の「絶対平和主義」として生き続けることになる。ところで、この「抵抗の思想」の「ゆるがない基盤としての農民」は戦争へと加担していくことになり、三好は転向の季節を迎える。著者は、II章の「転向」論において、三好のバルザックへの傾斜、及びマルクス主義「放棄」を指摘し、三好の転向を追求している。著者は、三好の転向、すなわち「階級意識の喪失と戦争肯定」の「原因」を「戦争」Ⅱ「死」が「金持にも貧乏人にも平等にやって来」る、「いわば疑似社会主義的社会状況」に求めている。この転向論は、IV章の「少国民戦争責任論」の著者の非戦論Ⅱ三好の「絶対平和主義」へとつながっていく。それは、「自らの血につながる肉親、隣人、民族」が「殺戮される」という「死」の「疑似社会主義的社会状況」の「前で、自らのさわぐ血をどう

処理」するかというあの転向の問題を通過せずして一切の非戦論は無効であるという認識である。

III章の「知識人」論は、本書の圧巻部分である。戦争責任論、戦後責任論、占領と再軍備の問題等々を通して、三好は、先程触れた知識人の道へと向かう。この知識人の道は、「反抗的人間」の道であり、「第三の道」であり、「絶対平和主義」の道であった。この道は、「地球がすでに自滅するエネルギーを手に入れた」てしまった状況を前提としての人間存在への問いかけであり、現在の虚無の深遠に届いていると著者は評価する。「知識人」への過度な期待、「知識人と庶民」といった枠組等への懸念が評者にはあるが、とにかくにも本書において不透明であった三好十郎像がかなり鮮明に打ち出されたことは否定できない。本書は、精密な著作目録・年譜とともに三好十郎研究を大きく前進させたと思う。

(まえだ かくぞう・文学部講師)

▽一九九五年二月・青柿堂・三二〇〇円

▽著者Ⅱ文学部講師